

# 集団場面における

## 絵本の読み聞かせと幼児の反応

—年齢・性差と座席の位置による影響について—

小 林 真

### 問題と目的

子どもが絵本に親しむ行動は、まず単なるおもちゃの一種と同じように、いじったり探索する行動から始まり、1歳半頃から絵を見たり、繰り返しパターンを喜ぶようになる。石川・前川(印刷中)の調査によれば、3歳前後になるとページどうしのつながりを理解したり、次の場面を予想するなど、内容の構造を理解できるようになる。したがって、単純な知識絵本や1ページごとの絵を楽しむ絵本ではなく、簡単なストーリー性のある絵本が楽しめるようになるのは、3歳頃からであるといえる。高橋・杉岡(1994)の実験でも、ストーリー中に明確な繰り返し構造を持った絵物語を提示した場合に、3-4歳児になるとある程度正確に理解できるようになること、さらに5歳児では繰り返し構造が曖昧になっても正確に理解できることが示されている。

並河(1994)は、工作の本や図鑑は見るが、創作物語や昔話の絵本を読もうとしなかった男児の例を報告している。並河(1994)はこの事例について、妹の誕生を契機に母親との接触が少なくなり、ことばを通じてイメージを作り上げる力が育たなかったのではないかと指摘している。母親が絵本の読み聞かせの時間を作るようになってから、戦闘シーンの多いTV番組を見ることが少なくなったという。

田島(1994)は、2歳児が絵本を読む際に母親がどのように対応しているかを観察し、プロトコルについて検討を加えた。母親の幼児に対する発話は、大きく「投げかけ・共感・統制」という3つのカテゴリーに分類された。その結果、幼児が相互作用をリードするような2者関係では、相互作用の頻度が最も多く、子どもが生き生きとしてお

り、共感的な発話も最も多かった。これに対して、母親がリードするような2者関係では、相互作用は少なく、子どもの表情もやや堅く、母親にも笑顔が少ないことが示された。また、子どもが拒否的な行動を示し、母親が統制的な行動を示す2者関係では、子どもは活発な動きを示した。これらの観察結果から、幼児が絵本の内容に対して、自分なりに考えた「付加的な発言」をすることが、共感的な母親の応答を引き出し、相互作用が活発に進むという結論が得られた。

こうした母子間の絵本の読み聞かせの研究から、1対1でじっくりと関わることで、子どもの絵本に対する興味を喚起したり、イメージづくりに影響していることがわかる。さらに、子どもが絵本に興味を示して、自分なりのイメージを作り、発言することが、母子間の相互作用を促進していることもわかる。すなわち、絵本の読み聞かせを通じて大人がじっくり関わることで、子どもの絵本に対する興味を引き出したり、知的な活動を促進し、それがさらに大人との間のコミュニケーションを促進するという、円環的な関係にあることがわかる。知的好奇心や想像力、さらに社会性の発達の上でも、幼児期に大人との間で絵本を媒介としたコミュニケーションの経験を持つことは重要なのである。

ところで、保育場面では主活動やそれ以外の場面でも、集団に対して絵本の読み聞かせを行うことが多い。しかし、親子間の1対1による読み聞かせについては上記のような報告が見られるが、集団に対して読み聞かせたときに、子どもたちがどのような反応を示すのかを体系的に観察した報告は見られない。そこで本研究では、集団を対象に絵本の読み聞かせを行った場合に、子どもの反応にどのような特徴が見られるのかを観察する。特に、年齢によって子どもの反応がどのように異なるか、同じ本を繰り返して読み聞かせることで子どもの反応がどのように変化するか、集団での読み聞かせでは座った位置によって反応が異なるか、という3つの問題について検討する。最後に、これらの結果を踏まえながら、保育場面で絵本を使用する際にはどのような点に留意すべきかを考察する。

## 方 法

被験児 私立幼稚園の園児90名

(3歳男児13名、女児15名、4歳男児16名、女児16名、5歳男児16名、女児14名)

**手続き** 登園後の自由遊びの時間を利用し、3～5歳児の各1クラスの子どもを対象に集団場面で絵本の読み聞かせを行った。なお、子どもの反応を観察しやすくするために、読み聞かせは各クラスとも男女別に行われた。読み聞かせの間の子どもの様子はビデオに録画され、録画に基づいて子どもの反応が記録された。詳細な手続きを以下に述べる。

(1)**実施時期** 全く初めての絵本を読み聞かせた場合と既知の絵本を読み聞かせた場合の反応を比較するため、同じ絵本の読み聞かせを2回実施した。1回目の読み聞かせは1995年11月上旬に実施され、2回目の読み聞かせは1996年1月下旬に実施された。なお、2回目の実施の際には、風邪による欠席者が多かったため、実際に読み聞かせを受けた被験者は1回目よりも少なくなっている。

(2)**材料** 提示する絵本の選定にあたっては、子どもたちがある程度自分なりにイメージを作ることができる創作絵本で、被験児がこれまでに読んだ経験がないこと、3～5歳児に理解できる内容であること、等を考慮した。幼稚園の主任教諭と数冊の絵本について検討した上で、「佐藤和貴子(著)『またよくばりすぎたねこ』こぐま社」が選ばれた。

この絵本のあらすじは、偶然鳥の卵を手に入れることができた欲張りな猫が、もっと多くの卵を手に入れるために巣箱を仕掛けるが、中にあったのはお化けの卵で、お化けの赤ちゃんを育てる羽目になってしまうというものである。

(3)**実験場面** 実験を実施した幼稚園における教育実習経験を持つ女子学生1名が、あいている教室に各クラスの園児を男女別に集め、手遊びによる導入を行った後に絵本の読み聞かせを実施した。男女別に読み聞かせを行ったのは、絵本の内容から、反応が男女で異なるのではないかと想定されたことと、録画を行う都合という2つの理由による。別の実験協力者が読み聞かせている間の子どもの反応をビデオカメラによって撮影した。1冊の読み聞かせにかかった所要時間は年齢によっても異なるが、1回目の読み聞かせでは3分30秒～4分15秒、2回目の読み聞かせでは3分～3分45秒であった。

**子どもの反応の測定** 読み聞かせの際の子どもの反応を記録するために、絵本に対し

て興味を示した行動と、興味を示さなかった行動についてのチェックリストが作成された。チェックリストを作成するにあたってはまず1995年8月に保育園において小集団に対する読み聞かせの予備実験を行い、いくつかの絵本に対する子どもの反応が録画された。この録画記録に基づいてチェックリストの原案を作成し、本実験での子どもの様子を見ながらTable 1のようなチェックリストが作成された。

データの記録は、15秒間を1インターバルとして、録画の画面を見ながらそれぞれの子どもが各インターバルに、Table 1のカテゴリーに示す行動の中でどれを最も多く示したかを判断して記録した。また、子どもの姿勢や座席の位置の変化によって、画面に映っていなかったインターバルは、欠損値として分析の対象から除外された。

子どもの反応の記録には4人の女子学生が分担して当たった。データ収集を行うに先立って、予備実験の録画記録と本実験での録画記録の中からランダムに選ばれた被験者を対象に、チェックリストを見ながら記録を取る練習が行われた。練習の際に、行動の分類に関して観察者間で不一致が生じた場合には、どのカテゴリーに分類すべきかの討議が行われた。数回の記録練習の後に、被験者全員のデータが収集された。

## 結 果

### 年齢・性別による絵本への反応の違い

(1)興味を示した時間の傾向 2回の読み聞かせ実験において、読み聞かせている間に子どもがTable 1のカテゴリーの中のどの行動をとったかが15秒ごとに記録された。その結果、1人あたり12~16個の観察記録が収集された。予備実験に基づいてTable 1のようなチェックリストを作成したが、実際には本実験では観察されない行動もあった。そこで、まず1回目の読み聞かせにおいて、興味を示した行動(1~10までのいずれか)が観察されたインターバル数を、全インターバル数で除して比率に換算した。この興味を示したインターバルの割合を従属変数とし、年齢(3・4・5歳)と性(男・女)を独立変数とした $3 \times 2$ の分散分析を行った。その結果、年齢については主効果が $F(2,83)=9.74(p<.001)$ で有意となったが、性の主効果および交互作用は有意ではなかった。興味を示したインターバルの年齢別の割合をFig.1に示す。Fig.1に示されたように、年齢が上がるにつれて読み聞かせに対して興味を示す割合が上昇してい

る。つまり、年齢が高くなるほど何らかの形で絵本に対する興味を持続していただけることがわかる。

同様に、2回目の読み聞かせについて集計したものがFig.2である。2回目の結果に関しては、年齢・性の主効果および交互作用のいずれも有意とならなかった。Fig.1と比較するとわかるように、2回目の読み聞かせでは全ての年齢の幼児が読み聞かせている間に絵本に対する興味を持続することができていた。

(2) 興味の示し方の違い 興味を示している行動の中で、年齢・性別でどの反応が多いかを検討するため、興味を示した行動の全体の中でそれぞれの行動が占める割合を算出し、年齢×性による分散分析を行った。その結果、まず「1.視線が本に向いている・本に集中している」に関して性の主効果が $F(1,83)=9.62(p<.01)$ で有意になり、女兒の方が静かに絵本に集中している傾向が示された。

次に「2.その場面に興味を示し、発言する」に関しては年齢の主効果が $F(2,83)=3.82(P<.05)$ 、性の主効果が $F(1,83)=4.05(P<.05)$ で有意になり、交互作用も $F(1,83)=3.41(P<.05)$ で有意になった。その結果をFig.3に示す。Fig.3からわかるように、絵本の内容について発言しているのはほとんど5歳男児のみで、それ以外にはわずかに4歳男児で発言がみられるだけである。

次に「7.集中しているが体が動いている」に関しては年齢の主効果が $F(2,83)=2.80(p<.05)$ で有意になった。その結果をFig.4に示す。Fig.4からわかるように、絵本をみながらモジモジする動作は3・4歳の男児に多い。

「8.前に乗り出す」は交互作用のみが $F(1,83)=3.65(p<.05)$ で有意になった。「9.微笑する」については年齢の主効果が $F(2,81)=7.04(p<.01)$ で、また交互作用が $F(2,81)=3.47(p<.05)$ で有意となった。微笑についての結果をFig.5に示す。Fig.5からわかるように絵本を見ながら微笑んでいるのはほとんど5歳男児だけであった。

2回目の読み聞かせに対する反応についても同様の分析を行ったところ、いくつかの行動で性差・年齢差が見られたが、最も顕著だったのは微笑であった。年齢の主効果が $F(2,65)=3.37(p<.05)$ 、性の主効果が $F(1,65)=8.52(p<.01)$ で有意となった。その結果をFig.6に示す。Fig.5とFig.6を比べると、1回目の読み聞かせでは5歳の男児だけが絵本の内容に反応していたのに対して、2回目の読み聞かせでは3歳児でも

若干の絵本に対する微笑が見られ、また4歳男児では微笑の反応の割合がかなり増えている。

また3・4歳児では、1回目の読み聞かせでは「2.その場面に興味を示し、発言する」という反応が全く見られなかったのに対して、2回目では、頻度はそれほど多くないが、反応が見られるようになった。そのほかに、「5.他の友だちとおもしろかったことを言い合う」などの反応も見られるようになっている。このように、統計的には有意とはならなかったが、1回目の読み聞かせに比べると2回目では子どもの反応が多様になっていることがわかる。

### 座席の位置による反応の違い

読み聞かせ場面の座席は全く自由で、子どもたちは横3～4列で、好きな位置に座っていた。録画記録を観察している際に、前の方に座っている子どもと、後ろの方に座っている子どもの反応の様子が異なっている印象を受けたので、1回目の読み聞かせ実験において、最前列に座っている子どもと最後列（クラスによって3列目ないし4列目）に座っている子どもを抽出して、興味を示したインターバルの割合について比較を行った。抽出された被験者は、3歳児では、前列10人・後列6人、4歳児では前列9人・後列7人、5歳児では前列8人、後列10人であった。

分析にあたっては座席の位置（最前列・最後列）×年齢（3・4・5歳）という2×3分散分析が実施された。その結果、年齢の主効果が $F(2,44)=10.63(p<.001)$ で、また座席の位置の主効果が $F(1,44)=4.94(p<.05)$ で有意になった。興味を示した割合を年齢・座席別に集計したものをFig.7に示す。Fig.7にみられるように、3歳児で最後列に座った子どもは、明らかに興味を示している時間が少ない。Fig.1からわかるように、3歳児の集中力は、平均すると読み聞かせの中の80%程度であるのに対して、後ろの方に座った子どもは60%弱の時間しか集中していないことが示された。4歳児になるやはり後ろに座った子どもの集中時間は短いが、それでも全体に集中できるようになり、5歳児では座った位置に関わらず、読み聞かせの間もずっと絵本に興味を集中することができている。

なお2回目の読み聞かせでは欠席者が多く、2列に座ったクラスもあったので、座席の位置と興味の関連性については比較を行わなかった。

## 考 察

本研究では、集団場面での絵本の読み聞かせに対して、幼児の反応がどのように異なるかを検討した。その結果、1回目の実験によって年齢によって絵本に集中できる時間に差があることが明らかになった。しかし、2回目の実験では年齢間に差がみられなくなったように、たとえ3歳児であっても、内容や場面に対する熟知度が上がることによって興味を示したり、集中することができるのである。

特に1回目の読み聞かせでは、題材に機械類が登場することもあるのか、5歳男児では絵本の内容について発言したり、絵本を見て微笑むなどの多様な反応が見られたが、それ以外のほとんどの子どもはじっと絵本を見ているだけであった。特に女兒にその傾向が顕著であった。これに対して2回目の読み聞かせでは、絵本の内容についての友だちとの会話や、微笑がみられるようになっている。つまり、同じ本を読み聞かせることによって、子どもの絵本の理解が高まり、それが子どものイメージを喚起したり、友だちとのコミュニケーションを促進する要因となっているのである。したがって、うまく子どもの興味を引くような絵本の提示をするか、あるいは同じ絵本を読む経験を積むことによって、知的・社会的な発達を援助することができるであろう。

また、絵本を見ながら体がモジモジと動く行動は、年齢と共に減少傾向にあった。この幼稚園では、絵本を見るときには子どもたちが正座をすることが一般的な習慣となっており、3歳児は脚を動かしたり重心を変える行動が多く見られたので、絵本を見ながらモジモジする反応がカウントされたのであろう。もちろん、2回目の読み聞かせでは内容に対する熟知度が上がり、集中することもできるが、全く初めての絵本に対して、ある程度の時間正座しながら見ることは、3歳児にとってはやや困難なことかもしれない。

最後に、子どもの座った位置と集中力との関連性について検討する。Fig.7に示されたように、座席の位置によって子どもの絵本に対する集中の程度が著しく異なっていた。今回の実験では子どもたちの座る位置は全く自由であったので、後ろに座ったために絵本に集中できなかったのか、もともと絵本にあまり興味のない子どもが後ろの方に座ったのかという因果関係については結論づけることができない。しかし、後ろの方に座ることで絵本が見えにくくなったり、前に座った子どもたちが気になって、

絵本に集中できなくなるという可能性は十分に考えられる。5歳児になると、理解力や集中力が発達するために、座席の位置による集中力の違いは見られなくなるが、少なくとも3歳児に対して読み聞かせをする時に、いつも同じ子どもが後ろの方に座るようであれば、意図的に前の方に呼び寄せるなど、個別的に配慮することは必要であろう。

集団場面での絵本の読み聞かせを行う際に、保育者は経験的に子どもの反応についての知識を持っているはずである。しかし、改めて体系的にデータを収集したところ、同じ絵本を2回読んだことによる集中力の違いや、反応の多様性など、子どもの反応が変化することや、座席の位置によって子どもの反応が異なることなどが実証された。本研究の意義は、絵本の題材の選定や内容に対する熟知度、あるいは子どもの配置などが読み聞かせに対する反応に影響していることを実証した点にある。こうした結果を踏まえて、今後の実際の保育場面における絵本の利用を考えていく必要があるだろう。

#### 【引用文献】

- 石川由美子・前川久男 発達援助としての絵本の利用 ―絵本理解と発達の順序性―  
筑波大学心身障害学研究, 印刷中
- 高橋登・杉岡津岐子 幼児の物語理解への物語の繰り返し構造の影響について, 発達  
心理学研究, 5, 111-122, 1995
- 並河真理子 大人と子どもと絵本のかかわり ―感じる力を育てる家庭保育の実践を  
通して―, 日本保育学会第47回大会発表論文集, 1994
- 田島 啓子 絵本読みをめぐる母と子のやりとりについての分析,  
日本保育学会第47回大会発表論文集, 1994

#### 【謝 辞】

本研究を行うにあたり、上田女子短期大学附属幼稚園の協力を得ました。また実験の実施・データ収集に際しては、上田女子短期大学の学生諸君(田中志野・斎藤麻美・高橋真由美・中島真由美)の皆さんに手伝っていただきました。また、石川由美子氏(筑波大学心身障害学研究科)には、文献上の貴重なご示唆をいただきました。ここに記し、感謝いたします。



**Table 1 子どもの反応の分類カテゴリー**

---

＜興味を示した行動＞

- 1.視線が本に向いている／本に集中している
  - 2.その場面に興味を示し、発言する
  - 3.本の近くまで寄って行って指を指す
  - 4.笑い声を上げる
  - 5.他の友だちとおもしろかったことを言い合う
  - 6.絵本の場面を真似する
  - 7.集中しているが、体が動いている
  - 8.前に乗り出す
  - 9.微笑する
  - 10.驚く
- 

＜興味を示さなかった行動＞

- 1.手足をモジモジさせて、落ちつかない
  - 2.横の友だちと(関係のない)話をする
  - 3.視線は本に向いているが、内容は追っていない
  - 4.ボーッとしている／あくびをしている
  - 5.全く違う方を向いている
-

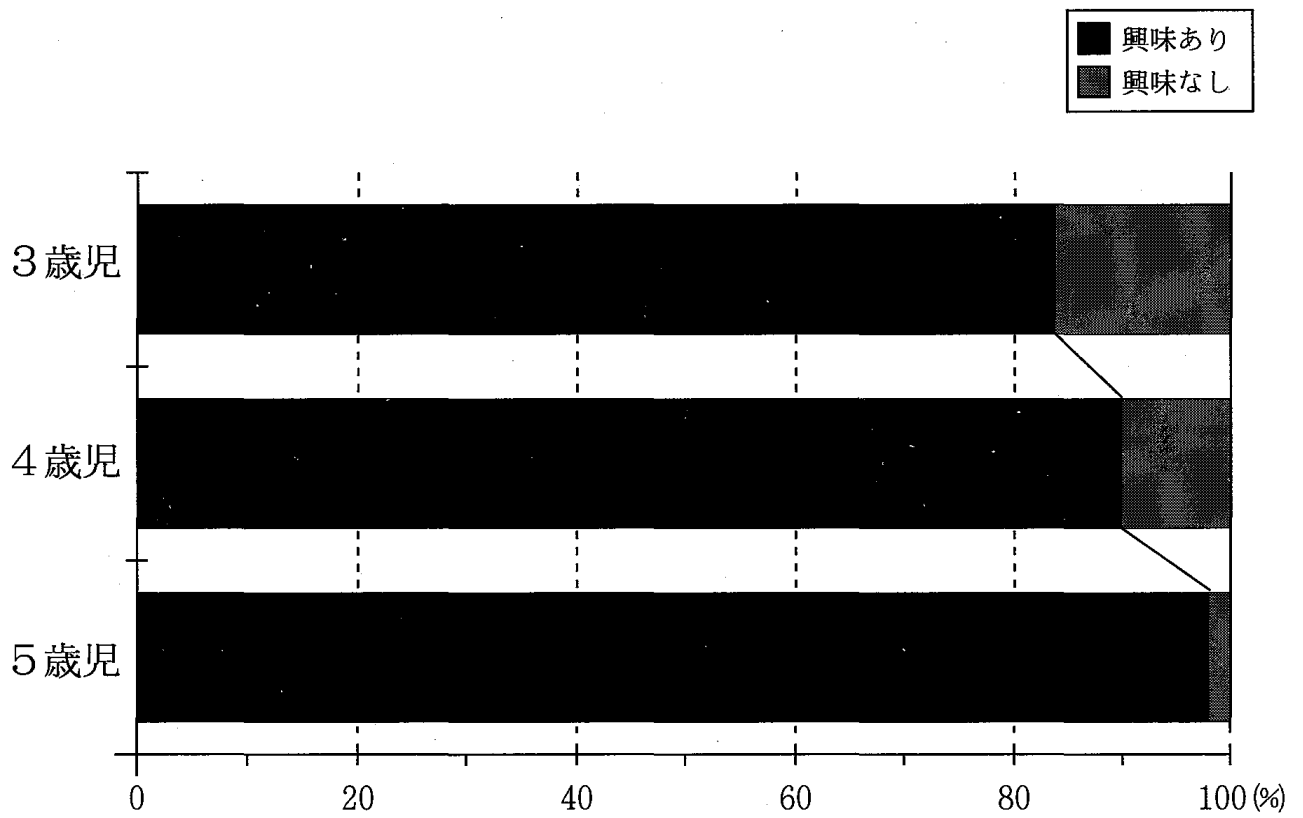


Fig.1 興味を示した割合 (1回目)

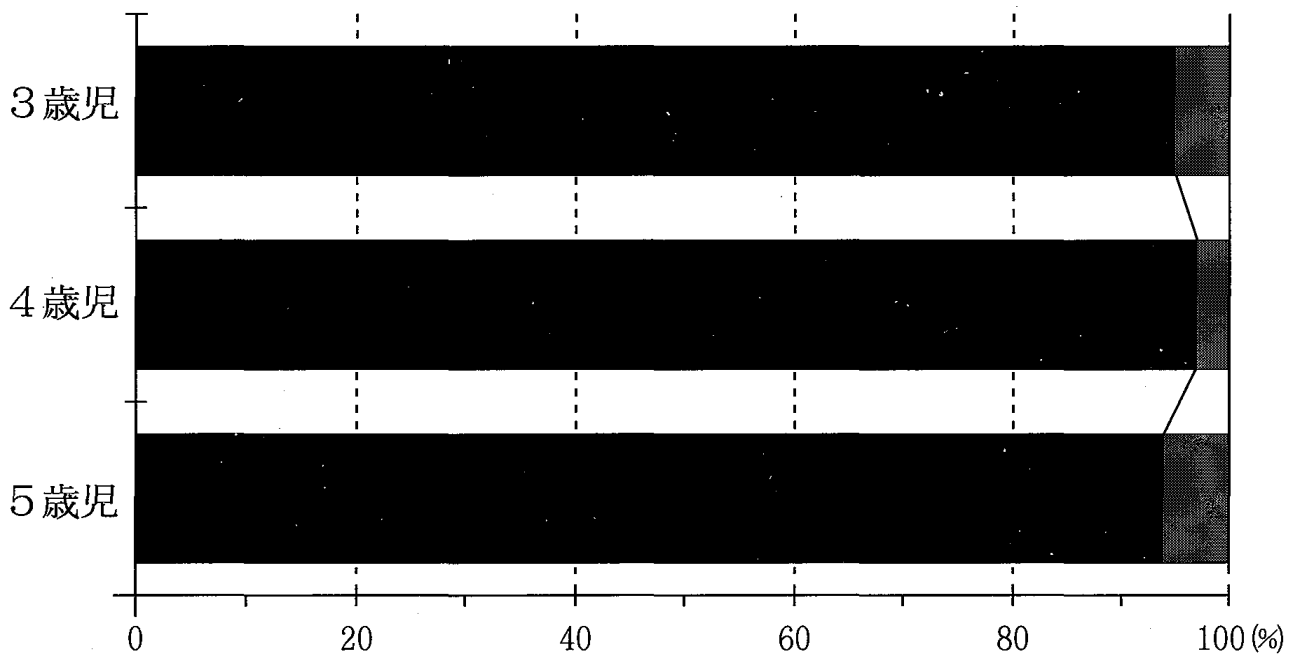


Fig.2 興味を示した割合 (2回目)

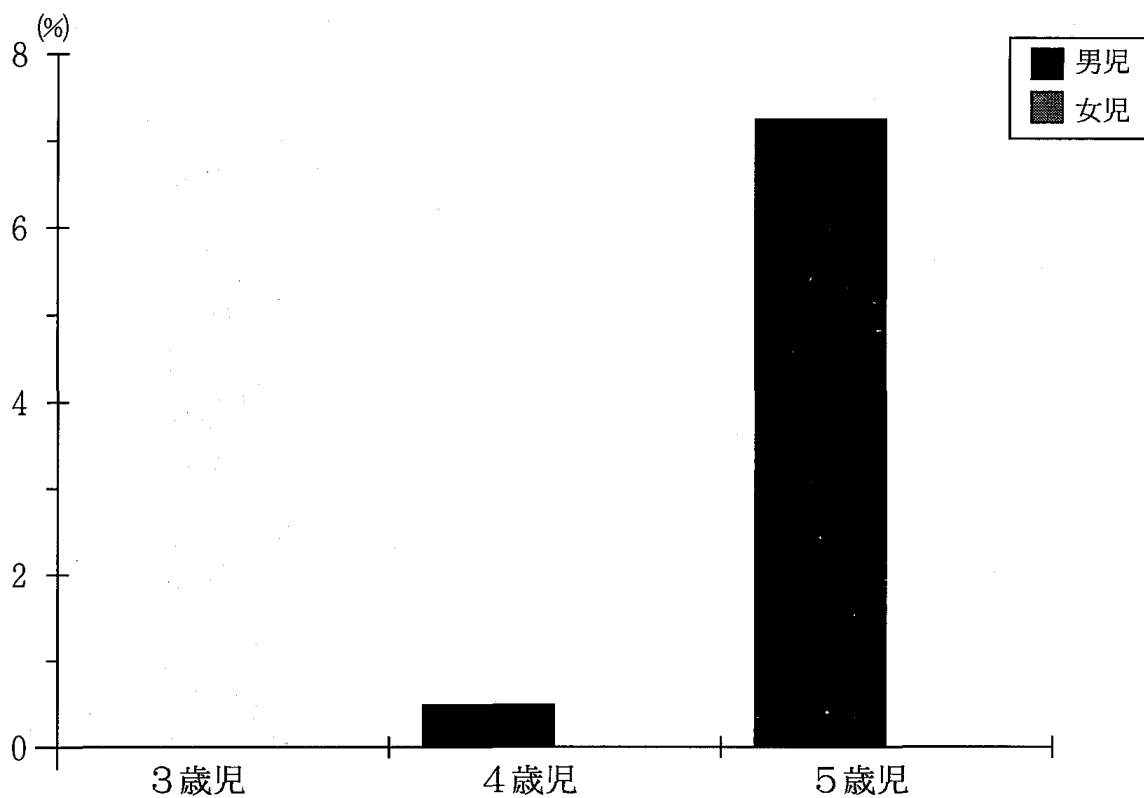


Fig.3 発言

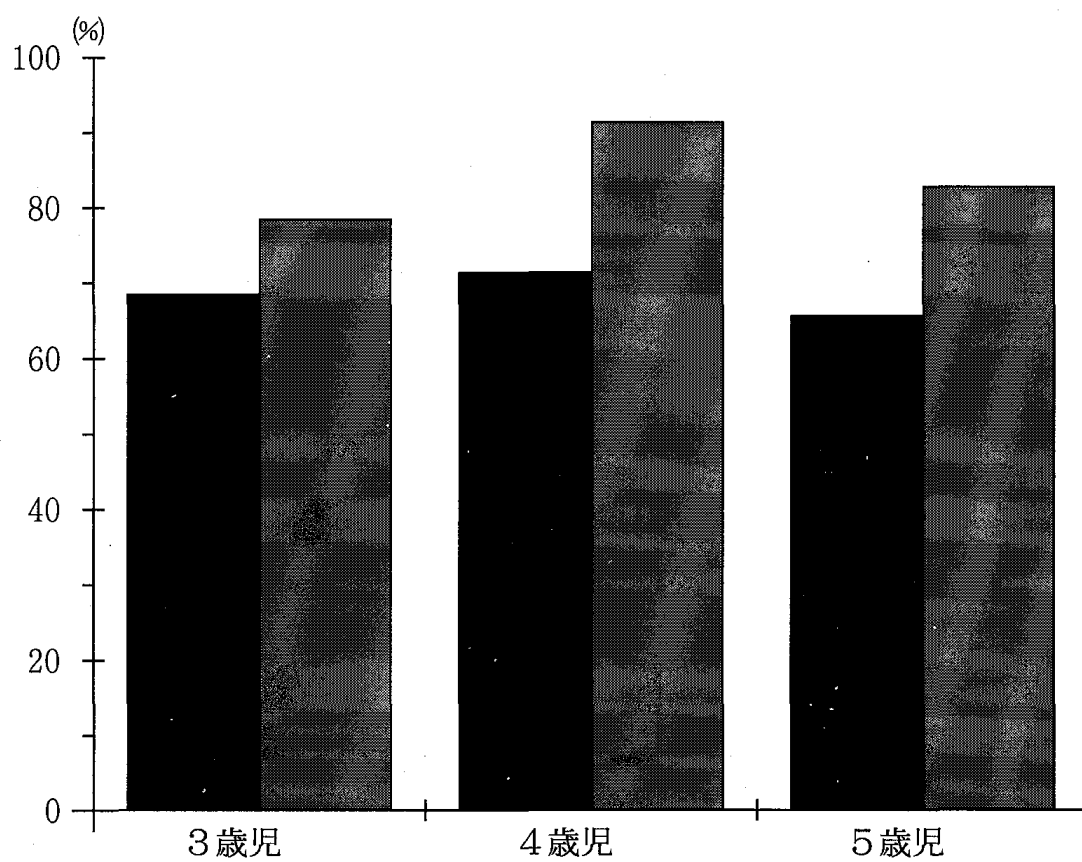


Fig.4 本への集中

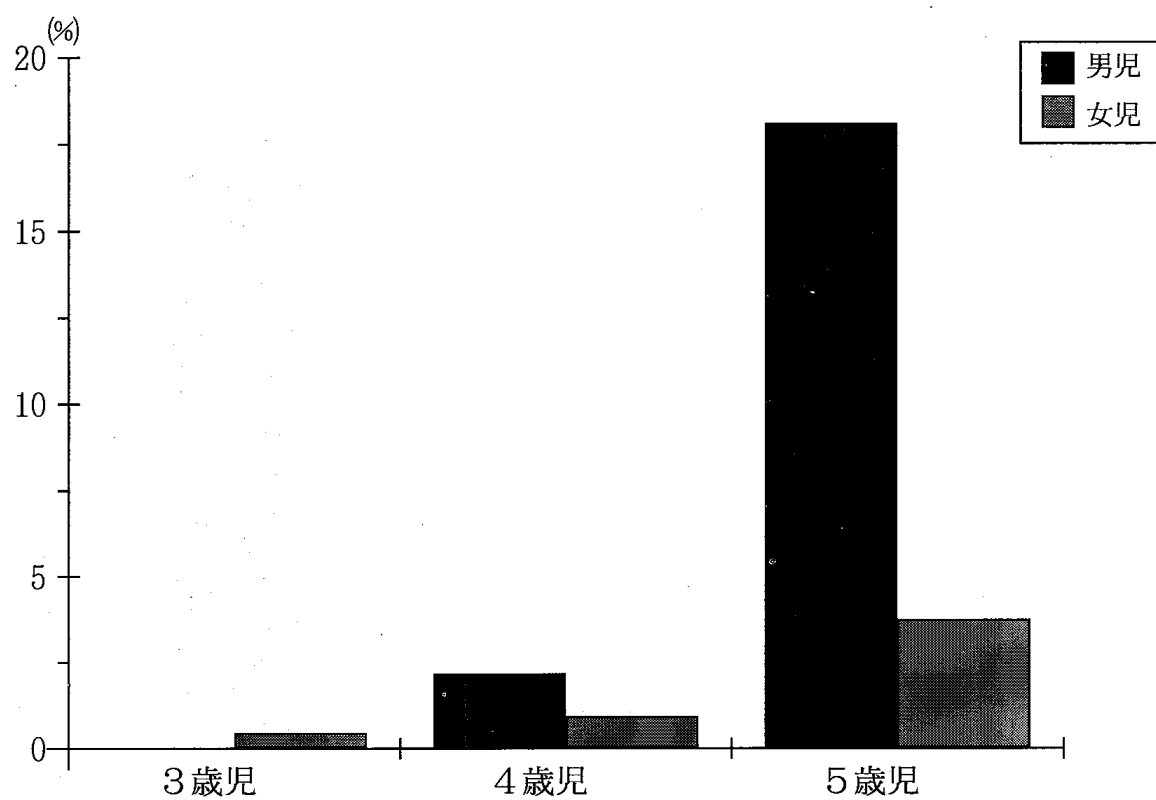


Fig.5 微笑 (1回目)

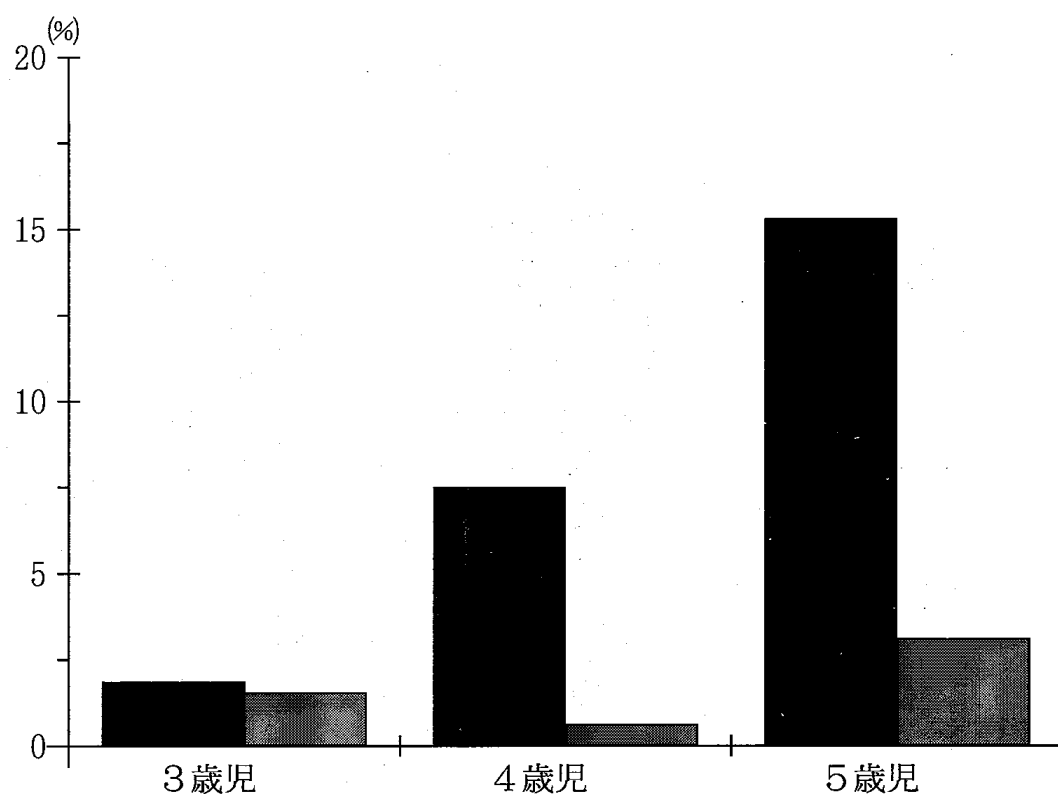


Fig.6 微笑 (2回目)

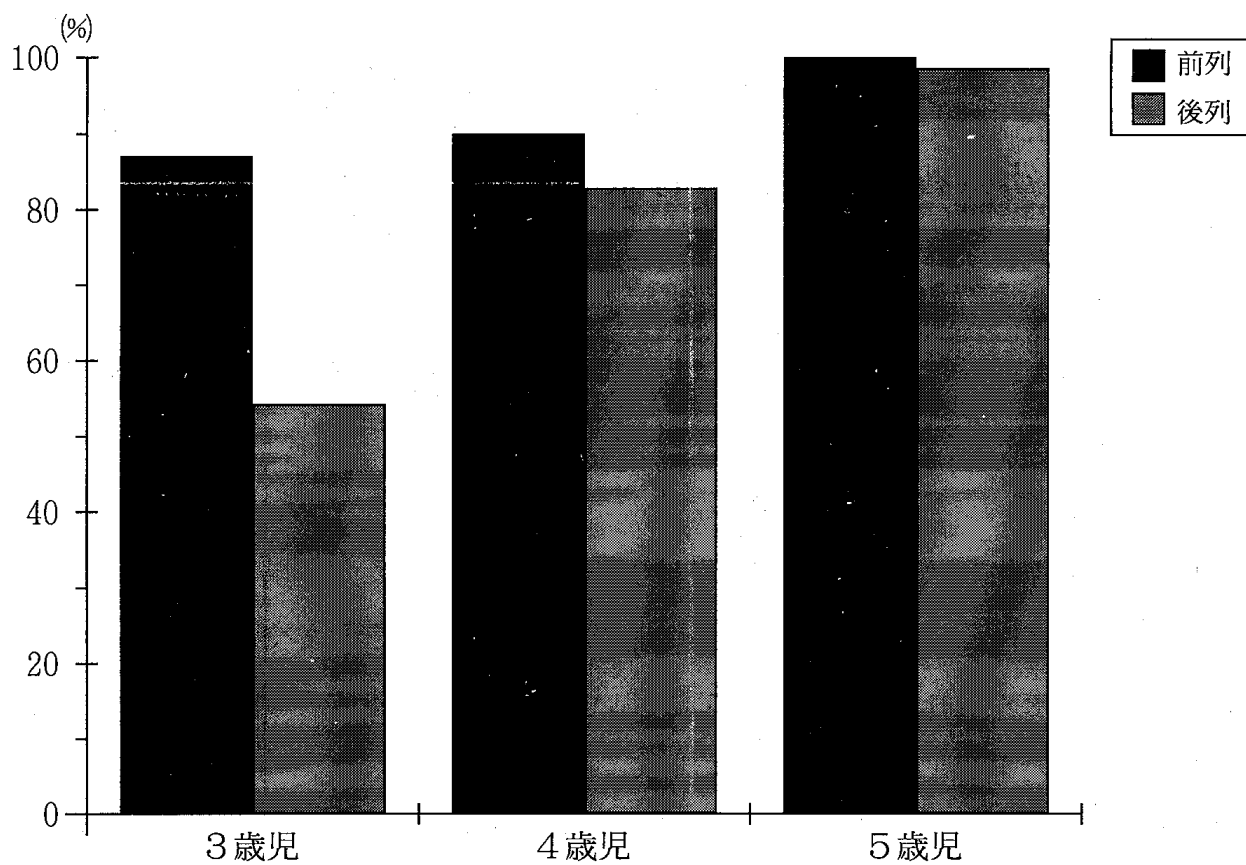


Fig.7 座席の位置による興味の違い